図書紹介（88）

『エスペラント―異端の言語』

田中克彦著　岩波新書　2007 年

おやさと研究所研究生
土井　幸宏　*Yukihiro Doi*

今日、国際共通語といえば、多くの分野で英語が当然視されている。飛行機どころか、観光地のバスでも英語のアナウンスがあたりまえにあり、“外国人”の顔を見れば、国籍に関係なく「ハロー」と声をかける日本人も多いであろう。ここまで英語が広がったのは、英語が本当に“正統な”文化をもった「自然言語」だからなのだろうか？

ヨーロッパではラテン語が、アジアでは漢文が長い間ずっと「正統な言語」であった。英語がそれに代わる地位につく前に、特定の国の言語ではない、新しい中立の言語をつくれば、言葉による不平等不公平がなくなると考える人がいた。ポーランドの眼科医、ルドヴィコ・ザメンホフである。彼が、「異端の言語」、エスペラントを創ったのである。

「誕生して一二〇年、国家の枠を超えようとする『危険な言語』、正統言語学者たちにとっては『異端の言語』」と言われるエスペラントをわかりやすく解説した本が、正統な言語学者、田中克彦が著した『エスペラント―異端の言語』である。

本書が発行された 2007 年は、第 92 回世界エスペラント大会（横浜）開催の年であり、この大会には私も参加した。著者の田中は日本エスペラント学会（現、日本エスペラント協会）の顧問ということもあって、この言語には好意的な立場である。それでもエスペラントを無条件に賛美することはなく、1887 年の発表から今日に至る厳しい道のりを丁寧に、かつ冷静に紹介している。

エスペラントは、初めかなりの支持を得た。ソ連では、1921 年に「ソビエト・エスペラント同盟」が設立された。しかし、1937 年に当局は解散を命じ、エスペラントに対する「大弾圧」をはじめた。ヒトラーも前年にはエスペラント運動を禁じていた。こうした権力の出かたを見ると、エスペラントは正統の言語学の伝統からみて異端の言語であったが、さらに政治的にも危険な脅威の言語であったと考えることができる。

ユダヤ人のザメンホフが、どの民族の言語にも属さないエスペラントを作る以外に、他にどのような言語的選択の道があったかを考察しているのは興味深い。著者が言う「固有の父祖の言語、古代ヘブライ語を復活させようというシオニストの道」も考えられたはずである。ユダヤ教の聖典の中にだけおさまっていたヘブライ語を、「汚れた日常の言語として使うことは許されなかった」にもかかわらず、エリエゼル・ベン・イェフダという人物が現代ヘブライ語を人工的に創り上げた。この「無謀ともいうべき試み」は見事に成功し、現在、ヘブライ語はイスラエルの公用語になっている。これに対し、エスペラントは今でも人工言語としか見られない傾向にあるが、このヘブライ語の例は、そもそもの人工言語（異端）対自然言語（正統）という対立の理論を脅かし、国語や公用語にはしばしば人の手が加えられていることの端的な例である。

エスペラントは確かに学びやすい。文字は例えばローマ字日本語を読むように作られている。英語では、a が ask ではアだが、make はマケではなくてエイと読む不規則性はない。また、ドイツ語、ロシア語のような格変化もない。

しかし、文法や字上符（ĝ、ĵ など）の存在に批判はあり、エスペラントを改良したイードという言語も作られた。こちらは、結局失敗に終わり、エスペラント界では「裏切り改訂版だと非難されることの多い」が、著者はこの二つを公平に分析している。例えば「ĝ、ĵ いずれも、この音で始まる単語は少なく、また、このオトの対立だけで区別されるような単語の対（言語学でいうミニマル・ペアー）は全くないらしいのに、エスペラントがこうした違いを残しておく、あるいは導入する必要は全くない」（85、86 頁）とエスペラントを両断している。また、エスペラントにおける「父パトロを主にして、そこから母パトリーノを引き出す方式」は、男主体の女性差別ではないかというイード支持者の批判に対しては、「せっかくエスペラントにそなわっている妙味を捨て去ることになってそれは惜しい話」と著者は反批判を行っている。

語根の多くは印欧語から取り入れているものの、エスペラントは、屈折的要素を廃し、むしろ「膠着的性格」があると著者は指摘する。これは同じく膠着語である日本語を話す日本人学習者に「希望」(Esperanto は「希望する人」の意) を与えている。本書の「第四章 アジアのエスペラント」の中では、大杉栄、二葉亭四迷、柳田国男、新渡戸稲造、宮沢賢治、北一輝、新村出といった著名な日本のエスペランチストの紹介はもとより、「エスペラントの思わぬ分野への展開」として、大本とエスペラントの重要な関係を述べている。イランのバハイ教の宣伝師フィンチ女史が大本における講演で「世界の平和は世界語によってもたらされ、各国民は自国語のほかに世界共通語としてエスペラントを用いる」と説いたことが、大本が日本で有力なエスペラント運動の中心になることのきっかけだった。

著者の言語と宗教に関する視点の鋭さは、エスペラント運動とは無縁だった天理教の描写に及んでいる。すなわち、「日本でいえば、中山みきが神がかりとなって一八三八年に生まれた天理教が、やがて大学を開き、そこに朝鮮語研究の拠点を設けたのは、キリスト教の布教が言語研究に向ったのと軌を一にしている。天理図書館が朝鮮語文献のみならず、東アジアの諸言語の文献を集め、そのことで世界に知られるようになった一つの大きな動機は、布教、伝道を強く意識したためである」（154 頁）と紹介している。

エスペラントをあえて「異端の言語」と呼ぶ本書は、むしろ、正統か異端かの議論の空虚さを指摘しているようにも思える。人工言語の歴史や概要を知りたい人に薦めるべき書物であると同時に、「言語が人類にとってどのような意味をもつか」という根本問題や、今日の英語支配に関心がある人にもぜひ読んでもらいたい一冊である。